室町期物語の一考察
――その特徴と価値――

三十回生　内野郁子

目次

序
本論
第一章　作品の分類及び内容検討
第一節　公家に関する物語
第二節　僧侶・宗教に関する物語
第三節　武士に関する物語
第四節　庶民に関する物語
第五節　異国に関する物語
第六節　異類に関する物語
第二章　先行文学との比較
第一節　先行文学の抜書き
第二節　先行文学の改変
第三章　室町期物語の特徴と価値
第一節　中世社会の時代背景
第二節　室町期物語の特徴
第三節　室町期物語の価値
結び

序

中世の物語文学は、南北朝から江戸初期までの約三百年間に、五百篇にも上る多数の物語が生み出されているにも拘らず、これらの文学的特性についての関心は、中古のそれとは比較にならないほど小さいと言えよう。しかもその関心は、一般に「御伽草子」の名称で親しまれている二十三篇の作品の域にとどまりがちであり、御伽噺、昔噺のイメージを脱していない。他の作品についても、先行文学の断片的な寄せ集めで、筋の変化が少なく幼稚で個性味の乏しいものとして、さほど価値性を認めていない評価も少なくないのである。しかしながら、中世のこれらの物語は、中古の物語文学と、近世の文学との深い谷間に位置しており、たとえその一つ一つに高い価値は望めないとしても、

総括的にみられる特徴には、それなりの意義が認められるはずだと私は思う。そこで、文学史上、他と比べてあまり脚光を浴びていない中世の物語に興味を覚え、その特徴や価値についての考察を、物語の分類と内容検討に重点を置き、さらに、先行文学との比較や、物語を生み出す地盤となった社会背景の検討を考え合わせて進めていこうと思う。なお、研究対象にした作品は、『室町時代物語大成』（角川書店刊・第一～第八巻）に収録されている二五六篇であり、その呼称については本稿では〝室町期物語〟と称することにする。

本論

第一章　作品の分類及び内容検討

本章では、市古貞次氏の説を参考に、どのような世界を表現しているかに主眼を置く主人公（舞台）別の六類三〇種の分類法に従って、二五六篇の物語を、(一)公家に関する物語、(二)僧侶・宗教に関する物語、(三)武士に関する物語、(四)庶民に関する物語、(五)異国に関する物語、(六)異類に関する物語、に分類整理し内容を検討していく。

それぞれの作品数については表一の通りであるが、公家物は僧侶・宗教物に次いで五九篇と全体の二三％を占め、その主たるものは、感傷的な懐古をもって公家の世界を描いた擬古物語といっても差支えない。しかし、王朝物語の単なる亜流という表現だけでは捉え得ることのできない性格も含んでいると思われ、その点を指摘しながら作品をさらに五種、(ア)恋愛物、(イ)継子物、(ウ)和歌的説話物、(エ)歌人伝説物、(オ)その他、に細分してみていこう。

＜表一＞　項目別にみた作品数

分類項目	作品数	（全体における割合　％）
僧侶・宗教	85	33.2％
公　　家	59	23.0％
異　　類	49	19.1％
武　　士	35	13.7％
庶　　民	16	6.25％
異　　国	12	4.7％

表二は、その分類に基づいて作品数と代表作品名を挙げたものであるが、王朝物語同様恋愛譚が依然として強く、和歌に対する関心も深かったと思われる。しかし、実際内容を考察すると、大半の作品において、王朝物語の部分的な模倣、あるいは全面的な改作を通して、筋の簡易化がなされ、一定の型にはまる傾向が見受けられる。しかもその型には先代の物語が持ち得なかった性格がある。ではまず、〝型〟について具体例を挙げながらみていこう。ここで物語の登場人物を仮に男主人公→A、女主人公→B、と置くと、以下の如き筋の運びが目に付くのである。

大団円型　…A（一般に容姿端麗、地位、才能に恵まれて

<表二>　公家物の取材別内訳

項　　目	作品数	作　　品　　名
(ア)　恋愛物	22	小伏見物語・狭衣の大将・しぐれ桜の中将物語・しのびね物語・雨やどり
(イ)　継子物	7	岩屋の物語・うばかは・住吉物語秋月物語・おちくぼ
(ウ)　和歌的説話物	10	うたたねの草子・十本あふぎ・四十二の物あらそひ・あま物語
(エ)　歌人伝説物	14	いづみしきぶ・神代小町・小町双紙・青葉の笛・花鳥風月・小式部
(オ)　その他	6	唐崎物語・十二人ひめ・十人

いる）が、B（両親を亡くしたりして淋しく世をはかなんで暮らす美しい姫君）を見染め、C（勝れた和歌、もしくは侍従等の仲立ち人）により結ばれる。幸福な日々が続くかと思われたところに二人の仲を引き裂く人物Dが出現する。Bの失踪、Bを探してのAの遍歴、そして再会、二人は人も羨むような幸せな生活を送り代々栄える。（作品によっては、遍歴する人物をBとするのもある。）

あるいは、

悲恋遁世型　…AはBを探すが、Bは既に死んでおり、Aは世をはかなみ出家遁世する。

といった筋である。例えば、『小伏見物語』の内容展開をみれば(略)悲恋遁世型にあてはめることができ、これとほぼ同内容の『桜の中将物語』では、Bが住吉明神の霊薬によって蘇生しAと末永く結ばれる、と大団円型の運びになっている。また、『さごろもの大将』ではDがBの父親となっているがやはり大団円型で表わせるし、『しのびね物語』の中では、Bは死なずに帝寵を一身にあつめたと変ってはいるが、その事に絶望したAが出家する点からして悲恋遁世型と言えるであろう。

以上は(ア)の恋愛物についての検討であるが、このようにみていくと他の四項目についても筋については似通った型が多いことが指摘できるし、また、これは主人公たちの人物像についても同様である。例えばAは、＜美しい容姿＞＜恵まれた地位＞を持つにも拘らず障害に対しては無力に等しい。神仏に頼るだけで、自分の意志や力で障害を切り抜けることはない。Bもまた、性格や心理描写など凡そ個性味に乏しく、信仰心の深さやそのため危機を免れる点まではほぼ一致している。このような型で主人公が描かれたことについて市古氏は、主人公に全面的同情を集めようとする一種の判官贔屓と、中世の理想化せられた公家が、如何に意力に乏しく女性的であったかを示すもの、と述べておられるが、私はそれに加えて、主人公の無力さを示すこと

で神仏の冥助が強調でき、宗教を思い通りに介入させることができたのではないかと思う。つまり何かある度に主人公が神仏に縋り、夢想などの加護を受けるなど、〝神仏との結びつけ〟を至る所に設けることによって宗教色を濃化し、仏教思想の唱道を行なったと考えるのである。こうした宗教思想の積極的導入は、この時代の物語を一概に亜流物語と呼べない要因として働いたと思われるし、ひいては宗教小説とも呼び得る(二)の僧侶・宗教に関する物語へと発展させていったと思われる。

僧侶・宗教物については九種に分類したが（表三参照）、その題材の殆どは前代に類のない新しいものであり、創作意図も仏教思想を強調し鼓吹する点が明確に示されている。宗教が民間に浸透し、寺社勢力が強化した中世という時代色を反映して、その主題も隠遁生活に入る動機や高僧の生

＜表三＞　僧侶・宗教物の取材別内訳

項目		作品数	代表作品名
(ア) 児物		10	秋夜長物語・あしびき・幻夢物語 嵯峨物語
(イ) 発心遁世物		11	くるま僧・高野物語・くちきざくら・三人法師
(ウ) 本地縁起物	(天竺)	15	愛宕地蔵物語・戒言・熊野御本地 厳島の本地・あみだの本地・いづはこねの本地
	(日本)	15	赤城御本地・おもかげ物語・貴船の本地・子易物語・塩竈宮の御本地・諏訪の本地
(エ) 高僧伝記物		9	釈迦の本地・恵心僧都物語・弘法大師御本地・浦風
(オ) 破戒僧物		3	おようのあま・さゝやき竹
(カ) 寺社縁起物		8	石山物語・賀茂之本地・住吉物語 善光寺本地
(キ) 事物起源由来物		6	庚申之御本地・神道由来の事
(ク) 説教法談物		7	賢学草子・大佛之縁起

ひ立ち、神仏の前生、寺社の創建の由来、あるいは僧侶の悪徳や失敗談と多方向から捉えられ、作品数も多い。しかし筋の型に関しては、児物では、Bを稚児、反対者Dを運命や物の道理と考えれば悲恋遁世型にあてはまり、本地縁起物では大団円・悲恋遁世型の最後に主人公が神仏となって現われる結びを加えたものと言えるように、前述した型が根底に据えられており、類型的で個性味に乏しいものである点は否めない。

また、中世は武士社会の時代であり、従って武士に関する物語も描かれるようになった。（表四参照）しかし、英雄譚の一主流をなした怪物退治物においても、宗教的要素の介入に焦点を絞って考察すると、『大江山酒典童子』、『岩竹』『鈴鹿の草子』など、どの作品にも主人公達の力強い働きには必ず神仏の加護がみられ、強い実権を握った武家の武勇譚においてさえ彼らは自分の力よりむしろ神仏の力を頼っているのである。源平時代を描いた作品についても、『小敦盛絵巻』『祇王』など平家関係の物語は勇壮な英雄譚というより哀れな公家物的色彩が強いし、源氏に関する作品も『浄瑠璃物語』の主人公義経の公家化や、仏教思想の影響が窺われるなど、物語の素材を武士世界まで広げた〝武士の文学〟でありながら、武士独自の文学に発展させることができなかったと言いえよう。このことは次にみていく庶民に関する物語、つまりこれまで扱ってきた以外の人物が主人公となった作品についても同様であろう。

庶民物については、笑話・寓話、恋愛成功譚、立身出世物と三種に分類したが、説話文芸・口承文芸の筋を承けついで、素朴な笑いでおかしみを表す作風や教訓性を有する作品が多く、主人公の性格についても、消極的な公家たちとは違って、自分の醜さや賤しさに臆することなく恋の成就をめざして積極的に振る舞っている。しかしそうした恋愛や出世の成功が彼らの歌徳や神仏の冥助によっている点や、出世して公家貴族に昇格した庶民ではなくなってしまう点など、庶民特有の性格を充分に持たせることができなかった庶民の文学の不完全な姿が見受けられる。

＜表四＞　武士物の取材別内訳

項目	作品数	代表作品名
(ア)	10	岩竹・大江山酒典童子・鈴鹿の草子
(イ)	16	御曹司島わたり・唐糸草子・小敦盛絵巻・じぞり弁慶・しみづ物語 浄瑠璃物語・祇王
(ウ)	5	あかしの三郎・あきみち・さくらゐ物語
(エ)	4	いそざき・恋塚物語・滝口物語

異国に関する物語については、中国、あるいは天竺、インドなど外国が舞台となり、その国の文学や説話の影響を承けたり、それを翻訳した作品、仏教思想に基づく作品が多く、他に異郷を描いた物語もある。これらの物語は、当時の人々が懐いた未知の地に対する憧れや好奇心の強さから生み出されたと考えられるし、また、日本における現実社会から遠く離れた異国を舞台にしたことにより、奇想天外で荒唐無稽な筋書きを自由に作ることができたのではなかろうか。

また、この時代に至って異類（人間以外の動物・植物、及び無生物である）を主人公とし、これを擬人化した物語も数多く作られるようになった。（表五参照）恋愛物や歌合物は公家的色彩が強く、獣や昆虫あるいは草木が歌を詠む構想は、「古今集」の序文の一筋を思い起させ、前代文学の影響による和歌重視の傾向が窺える。このことは物語中いかに多くの和歌が挿入されているかを調べた表六を見ても頷づけるであろう。武士物の影響下に成った軍記物についても、合戦譚の他に恋愛や歌合、遁世譚のいくつかを組み合わせて一篇を構成したものが多く、そのほか僧侶によって書かれたと思われる仏教関係の合戦物もみられ、武士、公家、僧侶の様々な立場から、それぞれの性格をそのまま取り入れて描かれていると言えよう。ただ、主人公が異類であるため、それが滑稽な笑いにも成り得たであろうし、あるいは異類でさえも歌を嗜んだり成仏したりできるのだから人間なら勿論だ、とする考え方にも繋がっていったのであろう。逆に考えれば、滑稽な笑いを表わしたり、歌や仏教を奨励するために異類を主人公にしたと言えるのではなかろうか。

＜表五＞　異類物の取材別内訳

項目	作品数	代表作品名
(ア)	8	朝貝のつゆ・うそひめ 玉虫の草子
(イ)	6	四生の歌合・胡蝶物語 ごほろぎ物語・花情物語
(ウ)	5	ゑんがく・雀の発心
(エ)	17	鴉鷺物語・魚太平記 獣太平記・強盗鬼神
(オ)	4	酒茶論・酒飯論
(カ)	9	かざしの姫・雁の草子 桜梅草子・木幡狐

第二章　先行文学との比較

一章で考察してきた物語には、先行作品の抜書きであったり、または改変であるもの（ここでいう改変とは、先行作品に加筆してある場合、一部が削除されている場合も意味する）がいくつかみられた。そこで本章では先行文学との比較を通して〝室町期物語〟の考察をさらに深めていこうと思う。

先行文学の抜書きと言える作品については、「今昔物語集」と『伊賀物語』、「宇治拾遺物語」と『雀の夕がほ』、

「平家物語」と『祇王』を取り上げて考察したが、これらは観音の利生を説く宗教色の濃い物語、教訓性の強い物語である点が指摘できる。

改変が認められる物語については、双方の相違点から原作と比較してどのような性格を持つようになったかを考察したが、「落窪物語」と『おちくぼのさうし』では、改変によって唱導文芸的色彩を持つようになり、庶民性も感じられるようになった。また作品の長さは比較にならないほ

<表六>　和歌挿入の度合

※　和歌挿入の度合（和歌数を頁数で割ったもの）の大きい作品を、項目別に挙げている。

分類項目	和歌挿入度合の大きい作品名	和歌数	頁数	和歌数／頁数
異類物	玉虫の草子	23	2	11.5
	雀の発心	56	7.5	7.47
	こほろぎ物語	37	5.5	6.73
	御茶物かたり	40	6.5	6.15
	四生の歌合	134	49	2.73
	勧学院物語	30	16	1.88
	うそひめ(別名ふくろう)	20	11	1.82
	雀さうし	64	39	1.64
	月林草	46	30.5	1.51
	玉水物語	20	14.5	1.38
公家物	四十二の物あらそひ	64	12	5.33
	あま物語	50	16.5	3.03
	扇ながし	64	29	2.21
	志賀物語	14	9	1.56
	衣更着物語	25	19.5	1.28
	住吉物語	42	38	1.11
僧侶・宗教物	西行物語	112	29	3.86
	伊豆国奥野翁物語	43	15	2.87
	塩竈宮の御本地	83	49	1.70
	賀茂之本地	20	17	1.18
	あみだの本地	20	20.5	0.98
	嵯峨物語	14	15.5	0.90
武士物	いそざき	12	12.5	0.96
	木曾よし高物語	15	25.5	0.59
	浄瑠璃十二段草子	21	41.5	0.51
	しみず吉高	6	25	0.24
庶民物	小男の草子	8	3	2.67
	さるげんじ	11	17	0.65
異国物	うらしま	4	3	1.33
	きまん国物語	5	28	0.18

ど短くなっており、人物設定や心理描写などは非常に簡単で筋本位的だと言える。「今昔物語集」と『硯わり』、「義経記」と『じぞう弁慶』についても同様でそれぞれ宗教色がかなり濃厚になっており、前代文学の題材を中世的に再生させたものと言えるであろう。このように、室町期物語には先行作品の抜書きや改作がみられる点から前代の様々な文学形態を取り入れていることが指摘できよう。また、抜書きされた作品については、そのもとになった先行作品自体に宗教色や教訓が認められ、改変された場合は、先行作品が唱導目的を果さない宗教色彩の淡泊なものである点から、筆者の唱導目的や読者の欲求を充たすべく宗教色が加えられたところに室町期物語の一特徴があると言える。

— 参 考 —

項目別にみた和歌挿入の度合

（和歌総数／各項目ごとの総頁数）

分類項目	和歌総数	総頁数	和歌総数／総頁数
公家物	932首	1,133	0.82
僧侶・宗教物	741首	1,505	0.49
武士物	152首	949	0.16
庶民物	46首	133	0.35
異国物	18首	132	0.14
異類物	905首	730	※1.24

第三章　室町期物語の特徴と価値

本章では総括的に室町期物語の特徴と文学史的価値について述べていこう。まず最初に、これらの物語を生み出す地盤となった中世社会について、史上稀にみる戦乱の世であったことを指摘しておきたい。鳥羽法皇の崩御を契機に勃発した保元の乱以後、さらに四百年近く後まで争乱の時代は続き、その中で新旧両勢力は交替し、勢力を失った公家貴族に代わって武士が活躍するようになった。そうした情勢での〝下剋上〟の風潮は、社会層の変動・混乱を引き起し武士をはじめ庶民の地位も向上させた。それに乗じて彼らが文学の世界にも進出していき、そのため物語の素材が拡大し多種多様な世界が描かれるようになったことは想像に難くない。しかし一方では、利害の衝突する至る所で絶え間ない闘争が展開され、人々はそのため生じた社会の混乱・生活の困窮に苦しみ、そして不安を懐いたのである。また戦のため人命はいとも簡単に失われ、人命、つまり人間が軽視されていた時代でもあった。このように中世はいわば修羅の世であり、現世で既にそうした地獄の責苦にさいなまれた人々がせめて来世にだけでも平安な世界を求めようとしたのは自然の理である。無常を説く僧侶の言葉がそうした人々の心を捉え、心の拠り所として宗教に救いを求めることになったのも当然なことと言えよう。また、社会が絶えず流動し変転し続け、動物的な欲望がうずまく血なまぐさい闘争に明け暮れた現実社会の中では、現世的なものや感覚的なものは否定され、優美で平和な過去や未知の世界、

以上の考察を踏まえ、室町期物語の特徴として、一種材及び

から、筆者の唱導目的や読者の欲求を充たすべく宗教色が加えられたところに室町期物語の一特徴があると言える。

そして来世に関心がむけられた。このように現実を超越したところに価値を認める傾向は、文学の世界においても王朝文化への憧憬、異国や異郷への思慕となって現われているのである。

＜表七＞　全作品の頁数の割合

頁数	1～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50頁以上
作品数	84	92	44	18	12	6
割合(%)	(32.8%)	(35.9%)	(17.2%)	(7.0%)	(4.7%)	(2.4%)

約7割　※平均……18頁

（参考）

	公家物	僧侶・宗教	武士物	庶民物	異国物	異類物
頁数平均	19.2	17.7	27.1	8.3	11.0	14.9

以上の考察を踏まえ、室町期物語の特徴に、(一)題材及び趣向の多様性、(二)短篇性、(三)類型性、(四)宗教性、の四点を挙げ、時代色を反映した物語である点を説明していこう。まず広範囲にわたる題材の採取、趣向の多種多様性は、一節でのあらゆる階級から主人公が生まれ、内容別にみれば三〇種に及ぶ分類が可能な点からも窺い知れよう。このように物語が広がりを持つようになったことについては、前述した戦乱下での下剋上の風潮と仏教思想の浸透及び唱導とによる文芸の大衆化が関与していたと考えられる。第二の短篇性という特徴は、この時代の物語の長さが、先代のものに比べていずれも非常に短くなっていること（表七をみてもわかるように五〇頁以上の物語は二五六篇中わずか五篇だけで、二〇頁未満の作品が全体の七割を占めている）また少ない紙面の中に主人公の半生か一生、あるいは『小式部』や『田村の草子』のように親子三代に及ぶ内容を盛り込んでいるところから、筋本位的であることを意味している。描写についても、人物の性格や心理に関するものは極めて少なく、その他自然描写など話の筋と関係の少ないものも省かれ、簡易化されていることが多い。こうした物語の短篇化、ストーリー性に中心を置く構成は、当時の作者たちの能力的低下も考えられるが、それ以上に読者層の拡張にともなう読み手側の限界に要因があったと考えられる。つまり、文芸の大衆化によって新しく読者に加わった知識・教養の低い民衆にとっては、長くて複雑な内容の物語より、すぐに理解できて面白味のある物語の方が歓迎さ

さい闘争に明け暮れた現実社会の中では、現世的なものや感覚的なものは否定され、優美で平和な過去や未知の世界、

れたためだと思うのである。また、そういう彼らの中には文字が読めない者も多かったであろうし、そうした人たちは他人の朗読を聞いたり、挿入された絵を見たりして鑑賞したと思われる。それは物語中多くの反復表現や誇張がなされていること、あるいは末尾に、「此物語を聴く人、まして読まん人は…」（『小町双紙』）とか、「此草紙を読み、人に聞かせ…」（『恵心僧都物語』）などと記されていることからも推察できる。また、人々が絵を見ながら鑑賞していたことは、作品の六割近くが絵巻・絵本の体裁をとっていることからも窺え（表八参照）、この時代の物語が絵本的性格を有していたことを指摘できるであろう。

<表八>

絵本の体裁をとる作品数の割合

項目	絵本の体裁をとる作品数（割合）
公家物	34／59（57.6％）
僧侶・宗教物	39／85（45.9％）
武士物	24／35（68.6％）
庶民物	15／16（93.8％）
異国物	8／12（66.7％）
異類物	30／49（61.2％）
計	150／256（58.6％）

第三の特徴として類型性を挙げたが、室町期物語の多くは、第一章でみてきたように一定の〝型〟――本稿ではそれを大団円型と悲恋遁世型としたが――を踏まえた筋運びによって構成されている。勿論、これまでにみられなかった新しい題材を扱った作品も少なくないが、どの分類項目においても相互に影響し合っており、独自性に欠けることは否定できない。また、類型的なのは物語の登場人物、特に主人公についても同様で、公家から庶民まで種々の人間が扱われていながら、その描かれ方は一様であり、およそ個性のない人物となっている。彼らの容貌についても全て同じような形容で表現されており、例えば姫君の美貌については次のどれかで描かれている。

○光るような、玉のような、という形容詞をつける。……『あま物語』『唐崎物語』

○月・花・露などの自然にたとえる。……『さごろもの太将』『石山物語』『唐糸草子』

○日本・外国の美人（小町・衣通姫・楊貴妃）にたとえる。……『恋塚物語』『雀さうし』

<表九>

宗教色のある作品数と割合

項目	作品数	割合(%)
公家物	54／59	(91.5％)
僧侶・宗教物	85／85	(100％)
武士物	34／35	(97.1％)
庶民物	13／16	(81.3％)
異国物	8／12	(66.7％)
異類物	30／49	(61.7％)
計	224／256	(87.5％)

によって構成されている。勿論、これまでにみられなかった新しい題材を扱った作品も少なくないが、どの分類項目また、人々は意外な事柄に出くわすと〝これは夢かや現かや〟とただ茫然とし、悲しい事態では〝天に仰ぎ地に伏して流涕焦れ泣く〟のである。こうした型にはまった表現は夫婦仲の良さなど他にもいくつか挙げることができ、従って類型的特徴は、筋にも表現の仕方にもみられると言える。宗教性については、何らかの形で宗教色が認められる作品数を調べた表九をみても、八七・五％という殆どの作品に申し子や夢想、示現などの神仏の利生や霊験が強調されており、出家遁世するもの、極楽往生するもの、神仏となって現われるものなど、宗教と文学が深く結びついていると言える。

さて、室町期物語は、その一つ一つについてみていくならば確かに独創性に乏しい文学的価値の低い作品が多いであろう。しかし、物語の世界が公家貴族から僧侶や武士、そして庶民にまで拡大されたこと、それにともなって諸作品が質的にも量的にも大衆的性格を持ち得るようになったことに関しては意義を認めても良いであろう。これらの物語は、王朝物語をはじめとし、その他先行の様々な文学形態――軍記物語や説話文学、そして民間説話に至るまで――を積極的に取り入れて、それらがまだ十分に整理されていない雑然とした形で混じり合っている状態にあるのである。そしてそれは中世という時代の中で、時には反発し合い、時には絡み合って、互いに影響し合いながら、中世的なものとして再生し、さらに次代の文学の骨格をつくっていったのである。つまり、次第に衰えをみせ沈滞していった前代の物語に、中世の様々な時代色を吹き込むことで生命力を持たせ、その中で新しく生まれ変わろうとしている、多様性・可能性を有した〝広がり〟を持つ物語と言える。

結び

「室町時代物語大成」に収録された二五六篇の作品について、まずそれらの分類と内容の検討を行い、次に先行文学との比較をすることによって、室町期物語の特徴とその価値についての考察をすすめてきた。特徴としては、趣向の多種多様性、短篇性、類型性、宗教性、の四点を挙げ、室町期物語が時代色を強く反映したものであることを指摘した。ところが、従来、室町期物語は中古の物語文学と、仮名草子・浮世草子に代表される近世文学との間にあって、それ自体あまり高い評価はなされていない。しかし、室町期物語は、王朝物語を承け継いでそれを中世的に再生したものや、当時の民衆の現実を鋭く表現したもの、近世小説への可能性を内在させたものなど、多種多様な広がりを持っているのである。私は、そこに室町期物語の史的価値を認め、新しい世界を切り開いていくための地固めの時期として、重要な位置を占めていると考えたい。